

『1173 (イイナミ)』の中学生日記

すべての中学・高校受験生の皆様へ

はじめまして1173 (イイナミ) です。

中学・高校受験の家庭教師をさせていただいております。

家庭教師という職業を通じて、沢山の子供たちに出会い、沢山教えられ、沢山助けられ、本当に、本当に感謝しています。

そんな感謝の気持ちを込めて、1173 (イイナミ) の受験日記をお届けします。

怖いことなど何ありません。たくさん学んで、たくさん悩んで、ときに切ない気持ちにもなって、悲しさを乗り越えて、あなたはお父様・お母様のような素敵な人間になってゆくのだもの。

☆ 受験生の皆様が1173 (イイナミ) に乗り続けてくださいますように ☆

感想を是非 ikki1173@yahoo.co.jp まづお送りください。
必ずお返事させていただきます。

目次

『僕』の中学生日記	三
心の声のままに、その決断こそ君の未来の第一歩！	三
優等生となった『僕』	一〇
迷いの入り口	一八
心の声に追い詰められて	二五
一四歳が出した決意	三〇
「心の声」に迷い悩む小さな小さな皆へ	三四

『僕』の中学生日記

心の声のままに、その決断こそ君の未来の

第一歩！

『僕』が初めて、自分の人生を自分で決断したのは、中学一年生の初夏、国語の授業中だった。全員目を閉じろといわれ、
「高校受験を考えている者は手を上げるように。」

とその先生は突然、質問をした。

ある程度の成績を押えてさえいれば、大学までの進学が約束されている中学校だからこそ、
『僕』は入学したはずだったし、入学早々、先生からも、両親からもしつこいくらいに「この学校では、大学に進学できるような成績を修めなくてははいけません。」といわれていた。
当然『僕』も、そうすることが当たり前だと思っていたし、それ以外の道があるなんて想像すら出来なかった。

「もう目をあけて良いぞ。」

と、その先生の声を聞いた時、僕は挙げていた手を下ろしていた。どうして手を挙げていたのか、自分でも良く分からなかった。自分にはまわりの皆とは違うぞと伝えたかったようにも思うし、何か使命感にかられていたようにも思う。ただ、確かにいえることは一つ。

『僕』はその二年後、受験勉強をもう一度スタートし、試験を受け別の高校へ進むことになる。

今にして思えば、あの時、手を上げたのは、これから待ち受けるその中学校での生活を本能的に察知していたのかも知れない。両親が、その学校の付属の大学への進学を心から望んでいたのは十分感じていた。テストでも、両手で数えられるくらいの順番には常に入っていた。部活もサッカー部に入って、一年生でレギュラーとはいかないまでも、最初は倒れ

そうになりながらこなしていた五キロのランニングも、いつの間にか余裕を持ってこなせるようになっていたし、僕の体の大きさとほぼ同じ（『僕』は中学一年生のとき一四〇センチちょうどだったわけだが：）サッカーボールが六個入ったケースを抱えて試合会場に行くことも苦にならなくなっていた。部活がない日曜日に友達とボウリングに行くのがとても楽しみで、コツコツとお小遣いを貯めたりしていた。そう、とても「楽しい」日々だった。

そんな「楽しい」日々の中で、どこか満たされない自分に『僕』は気づき始めていた。このままあと六年間も良い成績を取りながら大学に進学するということは『僕』にとって漠然としすぎていて実感が湧かなかった。実感が湧かないのだけれど両親も先生もそういうので、「そうしなくてはいけないんだ。」と何の目標もなく優等生であろうとしていた。（後で触れることにするが『僕』は小学校時

代、中々の問題児で母親を泣かせていた。中学校に入ったら、決して母親を泣かすことはしない。心に決めていたわけである。しかし、この決意も早々に破られることになる。ちよ、うどそのような時期に国語の授業中に「高校受験を考えている者は手を上げるように。」という質問があり、自然と手があがっていたわけである。もちろん、その時、高校受験をするつもりは少しもなかった。目標なく満たされない生活の中で常に優等生でありつづけることで、『僕』は少しずつバランスを崩していった。周りの友人達への思いやりも少しづつ減っていき勝手な自分を押し付けるようになっていた。それまで仲の良かった友人はだんだんと『僕』の側から離れていき、いわゆる不良と付き合うようになった。学校をサボって不良の友人とゲームセンターに行き、髪の毛を染めたりもしていた。自分で自分を追い詰め、もうどこにも自分の居場所を見つけないことが出来なかった。

そんなとき『僕』は高校受験という言葉から両親に伝えることになる。その後、約九ヶ月間の受験勉強をし、目標としていた高校に合格し、『僕』は最高の高校生活を送ることになる。もちろん何も後悔はなく、『僕』はあの時、精神的にも肉体的にも限界の中で頑張ってくれた小さな小さな『僕』に、今でも感謝をしている。満たされない叫ぶ自分の心の声に一生懸命耳を傾け、その声を聞こうと、もがき、苦しみ、自分を追い詰め、受験をするという決意をしたのは、たった十四歳の『僕』であった。世の中のことも何も分からなかったからこそ出せた結論だったし、もちろん両親の温かい理解と協力が必要れば成し得なかったことである。それでも、その決意がなければ今の『僕』はいない。

間違いなく、紛れもなく、一四歳の時のあの決意が『僕』の未来の第一歩であった。たとえ何歳であっても、自分の心の声と向き合おうと、真剣にもがき、苦しみ、悩んで出した決意はきっと自分自身をあるべき未来へと導いてくれるものだ。『僕』は信じている。少しくらいグレたって、道をそれたって、大切なことは自分自身から逃げないことである。逃げずに向き合った結果が、一日学校をサボってどこかへ行くことだったら、その声にしたがってみたら良い。きっと何かが見えてくるはずである。小学生であっても、中学生であっても、周りに流されることなく、自分の道を自分で切り開いてゆこうともがいている皆や、そんなお子様を持たれているご両親の皆様へ、自身の経験からのメッセージが伝わり、多様で溢れんばかりの才能を活かし、それぞれの道へ羽ばたいていってってくれる一助となること

をお願い、とても恥ずかしいのだけれど『僕』
の高校受験の時のことをもう少し詳しくお話
してゆくことにする。

優等生となった『僕』

中学時代の話をする前に、少しだけ小学生の時の話しにさかのぼる。そこにもやはり、自分の心の声を聞こうと、もがく『僕』がいた。もつとも、もがく『僕』は、自分を追い詰めることはせずに、両親や友人を追い詰めていたわけだが……。

当時は、ちょうどバブルの絶頂期で、いわゆる「お受験ブーム」の走り出した頃だった。『僕』も小学四年生になったときから塾に通うようになっていた。どうして塾に通うようになったのかは、良く覚えていない。ただ、商人の家に生まれ、商人として育てられ、商売を継いでいた父からは良く、

「お前には商売を継いでくれなんて言わないから、自分の好きなことをしたら良い。商人なんて、ろくなもんじゃないぞ。」

と、そんなことをいわれた記憶がある。あまり、子供達に、「ああしろ、こうしろ、」と

はいわれない父であるが、長男として、「商売を継ぐ」という鎖に、生まれたときからつなぐれ、自分の可能性を試せずに、大人になっってしまうという経験を子供達にはさせたくなかったのだろう。そんなこともあり、両親は、まわりで塾に行く子供達に遅れてしまうことのないよう、『僕』を塾に通わせた。

ただそれは、「通わせた」だけであった。両親は『僕』に、なんの目的意識を与えることなく、高いお金を払っている代償に、長く机に向かって勉強をして、良い成績を取ること、を期待していた。中学受験、といわれても、そもそもそれがなんであるのか、どうしてそれをしなくてはならないのか、全く理解していなかったし、勉強の仕方すらわからなかった。もつとも、そんな事で両親を責める気は毛頭ない。両親とも中学受験を経験していたわけでもなく、高校も都、県立に通っていたわけだから（当時の環境、時代背景からすれば、大半の子供達は、そういう流れに乗って

進学してゆくのが、ごくごく一般的なことであった。)、そもそも、どうして小学生の子供に受験勉強をさせなくてはいけないのか、私立の中学に通わせたいのか、そこではどんな生活が待っているのか、そういうことを体験として理解はしていなかったのである。ただ、「あなたを大切に思うから、家計が少しきつくなってしまうても塾に通わせてあげるし、大学まで進学が出来るエスカレーター式の学校に通わせてあげる。だから、きちんと勉強して、塾では、良い成績を取ってきなさい。」というその気持をいかにして子供に伝えるべきか、両親も悩んでいたであろうし、『僕』自身も理解できず、「どうして周りの子供達はこんな一生懸命に勉強するのか。」と不思議に思っていた。

目的意識もなく塾に通っているうちに、『僕』はなんだかバカバカしくなってしまうていた。毎日ある漢字のテストは、毎回白紙で出すようになっていたし、そんな報告を塾から受け

た父は、自分の気持が伝わらないことがもど
かしく、殴ってでも『僕』を机に向かわせよ
うとした。父もどうして受験させなくてはい
けないのか、ポジティブな実体験からは経験
していないし、『僕』自身も受験というもの
先に何があるのか分からず、もがいていた。
だんだんと塾をサボるようになっていた『僕』
をどうすることも出来ず、ただ殴るしか、な
かったのだろう。それは仕方のないことだし、
当然といえなくもないのかも知れない。ただ、
そういう生活の中で、『僕』は自分に制限をか
けることが出来なくなっていた。学校では気
に入らないことがあれば、だれかれかまわず
暴力を振るうようになっていたし、大学院を
卒業してきたばかりの女の先生にも、一切い
うことを聞かないばかりか、その先生が授業
中、急に倒れてしまうようになるまで、追い
詰めた張本人は『僕』だった。授業中、皆で
お菓子を食べたり、ゲームをしたり、ひどい
時には駄菓子屋までお菓子を買いにいったこ

ともあった。「悪ガキ」どころの話ではなく、「恐ろしい子供」に『僕』はなっていた。塾も、塾の方から電話があつて、「今は、やる気がないようですし、このまま通つて頂いても、お子様のためにもなりません。他の子供達への影響もありますので、お辞めくださいますか？」と、辞めさせられていた。学校からも、担任の先生だけでなく、教頭先生、校長先生まで家に来て、両親と膝を向き合わせて話すようになった。そんな日々が続いていた。ある晩、『僕』は初めて母が肩を震わせて、すすり泣いているのを見た。母は、気が強く、片親で育つたこともあり、人一倍家族を大切にし、守ろうとしていた。たとえ『僕』がどんなことをしていても、どんなに悪かろうと、「家の子は良い子なんです。そんなことをするはずはありません。」
と言いつけて来た母も、もう限界まで来ていた。そんな時、幼馴染のお母さんから、

「うちの子が通っている塾にこない？先生もきちんと一人一人の子供を見てくれるから、その子の状況に合わせて、少しづつ勉強してゆけるし、今の状態を少しは良い方に変えてゆけると思うの。」

というアドバイスがあつて、『僕』はまた塾に通うことになる。塾に行く初日、その幼馴染は家まで迎えに来てくれた。わざわざ、お握りももつて来てくれた。(話しはそれるが、そのお握りを電車の中で渡された『僕』は、折角作つてきてくれたのだから、その場で食べなくてほと思ひ、社内で大きな口をあけて食べてしまった。ずっと後になって、その子からすごく恥ずかしかつたと聞いて、『僕』も赤面してしまつた。)帰りは母が迎えにきてくれた。

「どうだった？」
としきりに聞いていた。母が「どうだった？」と聞いていたのは、漢字のテストのことだつた。それまで、塾での勉強に関して、特に教

えようとすることがなかった母が、その前の日は、夜遅くまで一緒に勉強してくれた。漢字に含まれている意味とか、由来とか、きつとわざわざどこかで調べてきたに違いない丁寧な説明を交えながら、繰り返し繰り返し、一緒に練習した。

「一つずらしてかいちゃって、消してまた書こうとしたら間に合わなかった。」

そういって、三十問のうち十問しかできていない答案を母に渡すと

「一生懸命やったんだもんね。」

と行って、すごく嬉しそうに母は笑った。相変わらず、どうして受験しなくてはいけないのか、どうして私立の中学に行くのか、そこではどんな生活がまっているのか、良く分からないままだった。それでも、勉強して、良い成績を取ることは、自分としてもまんざらではないし、何より、取りあえずそこにはもがいてきた結論があったような気がした。

両親も担任の先生も友人も傷つけて、どうし

ようもない状況で這いずり回るよりは、毎日勉強して、テストで良い点を取って、少し周りから尊敬されて、また勉強する。そんな生活の方がよっぽど楽だったし、何より母を泣かすことはなくなっていた。

『僕』は自分の心の声に向き合いながら、自分とは向き合わず、沢山の人を傷つけていた。そして、そんな『僕』を繰り返さないように「優等生」になってゆくことを決めた。

結局、優等生として一年弱を過ごした『僕』は、超一流校ではないにしても、そこそこの前の知れた大学が上についている付属中学校へ合格し、進学してゆくことになる。

迷いの入り口

そうして入学した中学校は、男子校の気風に溢れ、また本当に良い先生に恵まれた素晴らしい学校であった。一年生の時の担任の先生は、体の小さな『僕』をすごく可愛がってくれた。早く大きくなるようにと母が持たせる（結局あまり大きくならなかったわけ、このことに関しては母に深くお詫びしたい）。顔ほどもある大きなお弁当を懸命に食べている『僕』の横に座り、一緒に食事をしてくれた。嫌いな野菜を残そうとすると、
「先生食べ終わるまで横にいるからな。」
と、本当は色々忙しいはずなのにずっと付き合ってくれたりもした。
「先生は、今までずっと高校生を教えるて、毎日ぶん殴ってきたけれど、初めて先生の担任をして、君達のこと可愛くて仕方がない。試験を合格してこの学校に入り、しかもこのクラスに集まってくれた君達とは家

族以上の縁を感じる。だからこそ、全員が付属の大学に進学していてももらいたいと思う。」

と、厳しくも温かく僕らに接してくれた。そんな温かい先生方に見守られながら、一方で、「このメンバーのうち半分は大学進学が出来ないかもしれないんだ。」というプレッシャーを感じながら、試験では大体三〇〇人いる生徒のうち十番以内の成績を修めていた。当時その学校からは半分ぐらいまでの成績を修めていれば付属の大学へ進学することが許されたし、五〇番までに入っていれば、好きな学部に行けるといわれていた。もっとも中学生だった『僕』には好きな学部などあるはずもなく、意味がわからなかったぐらいだが、とにかく両親の期待を裏切らないように、決して小学生の時の過ちを繰り返さないように、そして本当に自分を可愛がってくれる先生の気持ちに応えるために、頑張っていた。

また、部活動も盛んな学校だった。『僕』は

サッカー部に入り、初めて先輩・後輩の関係を学び、また毎日気の合う仲間と共に、クタクタになるまでボールを追いかけていることを「楽しい」と感じていた。そう、「一つの出来事」が起こるまでは。

普段通りの練習が一通り過ぎ、顧問の先生が帰っていった後、いつも通りボールを片付けようと、二、三人の同期と共に、しゃがんでボールを網の中に放りこんでいた。すると、ポーン・ポーンとボールがこちらの方に蹴られてくる。「片付けるのを手伝ってくれているのかな？」と顔をあげてボールの来る方向に目を向けると、明らかにこちらの方角を狙い、かなり高い球を意図的に誰かに目掛けて蹴っているのが分かった。そして、後片付けをしている僕らとボールを蹴っている三、四人の先輩の間には、リフティングをしている一人の先輩がいた。その先輩は、中学三年生で、ボールを蹴っているのは中学二年生だった。中学三年生のその先輩は、中学三年生の中で

唯一レギュラーではなく、マネージャー的な役割をしていた。一人だけユニフォームをもらえずに、白いTシャツでプレーしているのは見ていて辛かったが、それでもサッカーが好きなその先輩は、僕らが片付け終わるまでリフティングやシュートの練習を一人黙々とこなしていた。後片付けが終わると、「ご苦労様」といって僕らが着替え終わるまで待っていてくれるその先輩を『僕』はとても好きだったし、尊敬していたので、ボールを蹴っている中学二年生の先輩達を「許すこと」が出来なかつたわけ来なかつた。「許すこと」が出来なかつたわけだが、かといって怒鳴るわけにもいかず、とっさに、その中学三年生の先輩のそばに『僕』は立った。ボールを『僕』に当てるわけにはいかないと考えたのか、それとも『僕』の行動に驚いたからなのか、先輩達はボールを蹴るのをやめ、良く分からない叫び声をあげながら帰っていった。

次ぎの日から、ボールを蹴っていた先輩達

やその先輩達の仲の良い『僕』の同期の態度が豹変した。何かと『僕』の行動に口を挟むようになったし、終には、部活が終わった後に塾に通っていたことを取り上げ、「そんなにしてまで大学に行きたいのか。」と陰口を叩かれるようになった。それでも、他の気の合う友人達と一緒にボールを蹴っていることは「楽しかった」し、いわゆる「優等生」への妬みはどこにいてもあるものだ。「割り切った」「いた。いや、「割り切った」「いるハズであつた。」

それでも自分の心のどこかに「くだらない」という叫びがあることに、目をつぶることが出来なかった。どうして「くだらない」と感じていたのかは、当時は理解できていなかった。ただ、決してもともと「優等生」であつたわけではない、それどころか「問題児」であつた『僕』が二度と小学生のときのように、「優等生」を演じてきた。大学進学しなきゃ、また両親

の期待を裏切ってしまうことになる、どうして『僕』は大学進学をするのか、そこに何が『僕』をまっているのか、理解できないままに良い成績を取ってきた。部活だって真面目に取り組んできたし、「一つの出来事」の時だって、自分の心の声に従って行動しただけだった。何も「間違った」ことはしていないはずであった。楽しいはずであった毎日、少しづつヒビが入っていった。ちょうどそのような中学一年生の初夏、国語の授業中に

「高校受験を考えている者は手を上げるように。」

と先生にいわれ、無意識に『僕』は手をあげていた。

結局、中学二年生の春に、『僕』は一年間続けてきた部活を辞めることになり、それをキツカケに「優等生」だった『僕』はだんだんとバランスを崩してゆくことになる。

まさに『僕』は迷いの入り口に立っていた。

心の声に追い詰められて

『僕』の心の中でこだまする「くだらない」という声は、日増しに大きくなっていった。「優等生」でありさえすれば、全てがうまくゆくと思っていた。「どうして」「なぜ」という自分の心の声には耳を傾けないようにしてきた。そういう声に耳を傾けるとどうなるか、小学校の時に経験してきたつもりだった。それでも、サッカー部で「一つの出来事」が起きたとき、瞬間的に、無意識に、『僕』は心の中の叫び声に反応してしまっていた。

サッカー部を辞めた『僕』は、サッカー部の友人達との付き合いも無くなっていった。辞めるに至った事情を知っている仲の良かった友人は、今までの通り仲良くしようと遊びに誘ってくれた。二、三回は一緒に遊びにいったが、返って気を使ってくれている皆と一緒にいるのはとても辛くて、自ら皆を遠ざけるようになった。

「どうして大学に行かなくてはいけないの
だろう」「どうして良い成績を取らなくて
はないのだろうか」「この先には何が待
っているんだろう」「そんな素直な自分の
疑問を抑えつづけてきたから生まれてし
まった」「くだらない」「という心の声
をその時はもう、抑えることが出来な
かった。
どうしてそういう行動に出たのか、悩
んでいる自分に先生や両親に気づいて欲
しかった
かっらなのか、『僕』は薬局でブリーチ
を買ってきて、髪の毛を真っ赤に脱色し
た。当時、
校則がとても厳しいその学校で、髪
の毛を赤くしている中学生などいるはず
もなく、また、
一般的にも髪の毛の色を変えている中
学生はととても珍しかった。身長一五〇
センチちよつとで、赤い髪をしている
わけ、不良というよりは「どうしちゃ
ったの」という感じであったが、目立
つことには変わり無かった。「優等生」
の突然の変貌振りに、誰一人として殴
りに来る先生はいなかった。驚きの目
で『僕』

を見ていたからなのか、別に怒るまでも無い
と見守っていたからなのか、きっとその両方
であったのだろう、とにかく「何も」なか
った。もし、他のちょっとマセた生徒が、そ
んな事をして来ようものなら、間違い無い
づれかの先生にぶん殴られて、その場で坊主
にされていたであろう。そういうことを予測
し、そういうことをしてくれることを心のど
こかで期待していた『僕』は、拍子抜けした
気分であった。
「どうでもいいんじゃない。」
という声が『僕』の心の中に広がってゆく。
いわゆる「不良」と付き合うようになったの
もそのぐらいの時期だった。学校の帰りにゲ
ームセンターによって、意味も無く時間をつ
ぶしていた。そうして仲良くなった友人の中
には、万引きをしてきたものを他の友達に売
りさばいている者もいた。『僕』もいくらか払
って、欲しくも無い時計をそいつから買った
こともあった。「どうでもいいんだ」そう自分

に言い聞かせているようであった。そのうちその「不良」グループの活動はエスカレートしていった。学校をサボってゲームセンターに入り浸るようになった。そして、ある日たまたま一人、学校をサボってゲームセンターに行っていたとき、『僕』は警察に補導されることになる。

学校に知らせがいき、担任の先生が飛んできた。もちろん母も来ていて、その顔は真つ青であった。結局、厳重注意を受けて、夕方母と共に岐路についた。母はうつむいたまま唇を噛み締め、何も言おうとはしなかった。その日の夜、担任の先生から電話があり、その電話を受けながら母はボタボタと涙を床に落としていた。

もう決して母を泣かすまいと心に決め、「優等生」になるはずであった。決して心の声に惑わされることはないよう、しつかりと抑えこんできたはずであった。まだまだ小さく未熟であった『僕』は、その反動で生まれた「く

だらない」という心の声に大きく振られ、「どうでもいい」と自分自身を追い詰めることでしかその心を支えることが出来なかった。結局、母を泣かすという同じ過ちを繰り返すことになった。そして今度は小学生の時と違い自分自身、精神的にも肉体的にもかなり追い詰められていた。

そう『僕』は自身の心の声に追い詰められていた。

一四歳が出した決意

結局、髪の色も元に戻し、もとの通り、きちんと学校に通うようになった。ただし、そこには何も目標の持てない、何も自分の生きがいを見出すことのできない『僕』がいた。小学校のときのように自分自身の「迷い」を両親や先生や友人にぶつけることで人を傷つけることはやめようと、『僕』は「迷うこと」をやめたはずであった。それでも、どうしても「迷う」自分を抑えることが出来ずに、『僕』は自分にその「迷い」の矛先を向け、自分だけを傷つけていた。つもりだった。結局、母親も傷つけ、先生からも失望の眼差しを向けられ、友人も離れてゆき、抜け殻のような『僕』だけが残った。

何をどうしていいか分からない日々のなかで、かろうじて習慣的にテストだけは良い成績を取り続けていた。別段、他にすることはなかったし、良い成績を取ることではなにか、

自分の存在価値を自分自身にも周りにも認めさせようとしていた。

「何も目標の見出せないこの生活の中で、『僕』はいつまで良い成績を取り続けられれば良いのだろうか。」

そう迷い戸惑う『僕』の心の声は日々大きくなっていった。そんな時、『僕』は中学一年生の初夏、国語の授業中に

「高校受験を考えている者は手を上げるように。」

と先生にいわれ、無意識に手を挙げたことを思いだし、

「どうせ勉強をするんだったら、このまま、くだらだらと、あと何年間も続けてゆくよりも、残り一年間と少しイヤというほど勉強して、全員が大学へ進学できる学校へ入りなおして、そこで好きなことを見つけて、思いっきり取り組んでゆくことの方が、『僕』にとっては良いのではないか。」

と考えるようになっていった。もちろん、

当時一四歳の『僕』はそんなに整然と自分の
思いを理解できていたわけではなかった。良
い成績を取れば取るほど、周りから陰口をた
たかれてしまうようなくだらない環境にこれ
以上いたくない、逃げ出したいと考えていた
のも本当だったし、そんな環境から「逃げる」
ではなく「抜け出す」方法を『僕』は他に知
らなかつたというのも事実であつた。周りが
誰一人、受験しない環境の中で、ただ一人受
験をしてゆくことの「大変さ」も知らなかつ
たわけだが……。
とにかく、何も目標も無く、やり甲斐を見
つけられないままの生活を終わらせ、『僕』は
『僕』を前に進めるために、中学二年生も終
わりに近づいた二月、高校受験をすることに
両親に伝えた。

一四歳になつたばかりの冬、『僕』は初めて自
分の未来を決める決断を一人で出した。

先のことなど何も分からない、分かるはずも無かった。ただただ、自分自身の「心の声」を限界まで抑えこんで、我慢して、それでも湧きあがる「お前の居場所はここには無いよ。」というその声に従い出した結論であった。両親も、担任の先生も最初は驚き、戸惑っていたが、『僕』の決意は変わらず、中学三年の一年間という限られた時間の中で、『僕』は受験勉強に取り組んでゆくことになった。

「心の声」に迷い悩む小さな小さな皆へ

結局『僕』は、その後、受験勉強をスタートし、希望の高校に合格し進学してゆくことになる。進んだ先の学校では、水球部に入つて、苦しいし、厳しいけれど、沢山の良い恩師、先輩、同輩、後輩に恵まれたかけがえの無い高校生活を送ることになるし、そこで培われた経験が、今の僕を半分以上作り上げたといつても過言ではない。

受験勉強は、とてもとても苦しいものであった。第一に、もし受験に失敗すれば、もっていた学校には戻れず、高校浪人となるわけでももちろんその程度の学力をクリアしている自信はあったものの、大きなプレッシャーであったことには間違いはない。あまり、そんな事を自慢しても仕方が無いので、多くは書かないが、受験当日の『僕』は、襖の梁にハサミを突き刺し、これが試験を終えて家に返ってくるまでに、落ちていなければ、『僕』も落

ちていないと、そんなことを本気でしていた。
あとで、母に「この穴はなんだ。」と聞かれ、
正直に答えたところ、怒ることを忘れて、絶
句していた。

この章の冒頭でも書いたが、今でも『僕』
は、その小さな小さな心と体で、自分の声を
聞こうと、思い、悩み、ボロボロになりなが
ら、何一つ先が見えない状況の中で、自らそ
の歩を一つ進めるために、「受験」という決意
をし、やはりボロボロになりながら、きちん
と結論を出した当時の『僕』に感謝している。
もちろん、両親、先生、周りの皆に支えられ
ながらの挑戦であったことはいまでもない
が、今の『僕』を導いてくれた、当時の小さ
な小さな『僕』に恥じることはないよう、こ
れからも『僕』は、自分自身の「心の声」に
しっかりと耳を傾け、思い、悩みながら、挑
戦を続け、成長してゆきたいと思っている。
たとえその年齢が何歳であっても、小学生
であろうが、中学生であろうが、「どうして」

「なぜ」と思う自分の「心の声」を抑えつける必要はない。「どうして」か分からず、思い悩み、もがき苦しんでも答えが出ず、少しくらい道を外してしまっても、かまわないと『僕』は思う。それが本当に自分の心と向き合おうとした結果なのであれば……。思い、悩んでいる期間、人を傷つけてしまいかも知れないし、自分自身をボロボロにしてしまいかも知れない。それでも、そうして真剣に自分の「心」と向き合おうとした者だけが、何か次ぎの挑戦すべき目標を見出すことが出来るし、それに向かつて、はいつくばってでも、進んでゆくことが出来る。そして、必ず眩いばかりの光を手にする事が出来る。傷つけてしまった人には、それからいくらでも許してもらいに足を運べば良いし、それが出来なければ、きちんと自分の背中に背負ってゆけば良い。小さな小さな心と体で、押しつぶされそうになりながら、「心の声」に正直にあらうとしている皆は、その思い悩む「自分」こそ、自

分自身の輝ける未来へ向けた第一歩となると信じ、決して、その「心の声」を閉ざさないで欲しい。自分自身、何をしたいのか、何をすべきなのか、良く分からないかもしれない。自分を待っている未来が分からずに、不安になってしまうことも多いかもしれない。それでも、小さな小さな皆が思い悩んでいることは絶対に正しいし、否定する必要は無い。だからこそ向き合って、答えを出して欲しい。ここまで、書いてきた話はいくまで『僕』が「心の声」に悩み、そして一つの人生を決める「決意」をしたという個人の例である。皆には皆の「心の声」があり、そして「決意」の時期ある。子供だって大人だって自分の人生を決めるための「心の声」は平等に重たいものだし、誰に何を言われる必要もない。つたない『僕』の話ではあったが、小さな皆が、自信をもって自分の「心」に耳を傾け、自分自身で自分の道を切り開いてゆく一助となれば、こんなに嬉しいことはない。

心
の
声
の
ま
ま
に
、
そ
の
決
断
こ
そ
君
の
未
来
の
第
一
歩
！